

その理由は、歌枕の本質それ自体と深い所でかかわっていると思われるからである。又、清水の音羽山が、平安京の東郊、東山三十六峰（この数え方は近世になってからであるにしても）の一であり、

『源氏物語』の「夕顔」にも描写されている如く、（中ごろの澁谷越の隆盛をしばらく別にするにしても）、詠歌には最も有利な条件を具備しているにもかかわらず、歌枕の「おとは山」としては、最後まで山科の方が原則とされたのは何か理由があるのか、という事にしかるべき説明が与えられねばなるまい。

清水寺が名刹であることは今更言うまでもないことである。草創も、延暦年間と古く、坂上田村麻呂がかかわっていたらしい。

山科の音羽山には法厳寺があり、これはさらに古いらしい。甚だ伝説めいてくるが天智天皇の代とする。平凡社『歴史地名集成、京都の地名』によって記す。

音羽山の支峰牛尾山中腹にあり、本山修験宗（単立）厳法寺ともいう。山号を牛尾山と称したが昭和二〇年（一九四五）牛王山と改称。本尊千手観音（註、天智天皇御作）。清水寺の奥院とされた（山州名跡志ほか）……………

法厳寺の地と清水寺との関係は、同縁起（『清水寺縁起』）によればその創建以来ということになるが、音羽山、音羽川音羽滝のある山科の地と、山号を音羽山という清水寺が結びついて、奥院とされたのであろうか。

又、「音羽山」の解説には

牛尾山法厳寺の観音に対する信仰が貴族階級に広がっていくにつれ、寺のある音羽山が名所となったものであろうか。

とする。これは歌枕の起源についての解釈であるが、一般的な意味で観音信仰が歌枕の起源とかわりがあるとは思われない。今の場合も、音羽山清水寺の観音信仰が上下にわたって盛大であったことは、さまざまなものに見ることであって、その点については、法厳寺を上まわすることは事実である。故に、山科の音羽山が歌枕として取扱われる事実を観音信仰に帰することは無理であろう。

歌枕の起源の、その多くが、元来、この国土に存在した原始的な信仰と結びついていることは広くみとめられることである。今の場合もこの原則があてはまると思われる。即ち、法厳寺が修験宗を名のるごとく、古い山岳信仰が所在する所である。山内を散索しても、その証拠は歴然としている。

今の場合も、他の多くの例（「いなりやま」「かもやま」「吉野山」「石槌山」など）と同じく、山科の「音羽山」に元来存していた、古い山岳信仰と結びついて歌枕となったと考えるべきであろう。このことは「音羽山清水寺」の平安時代における隆盛にもかかわらず、歌枕の「おとはやま」は、依然として山科にかぎって考えられてきたという現象を説明するものだと思う。

路の入り口と意識されていた。

道の口栗田の山に秋霧のたちてか駒も近づきにけり 夫木抄

以上、「おとはやま」について考えてきた。古今集や源氏物語の時代の「おとはやま」は山科の音羽山と考えなければならぬ。歌枕としての音羽山は、歌枕は、三代集（又は八代集）時代の用法が踏襲されるものであるから、やはり山科の音羽山である。能因歌枕が山城と近江の国界として記し、井蛙抄が「おとは山は限山階敷」と記していることもそれを示す。森本茂氏の『校註歌枕大観』には六十八首の證歌が掲げられているが、「所収の和歌でみると、歌枕としての音羽山はほとんど山科の方に限られるようである」と説明があるが、大綱その様に考えられる。

勿論、例外もあることは一応の注意を要することである。『校注

歌枕大観』の六一、『拾玉集』

驚の山なき人まどふ法の道の音羽の露を打拂ひつつ 五六六一

「わしのやま」は詞書に

我立杣之中幽居谿之洞有靈山院忍驚嶺隱欲彼惠心之素懷……

とあることによってもわかるが、『八雲御抄』では

わしの山は靈山也。

と端的に記す。平凡社『歴史地名集成、京都市の地名』では「靈山」は「東山区清閑寺靈山町」とし、

靈山は靈鷲山の略で、鷲山、鷲尾山ともいい、東山三十六峰の

『音羽山』について

一。又同山付近の字名。

東は旧清閑寺清水上山、南は清水門前一町目、西は八坂桝屋町、北は旧栗田口村花頂山につづく。

とする。『拾玉集』の「靈山院」とは、同地にあった靈山寺のことか。同書の「靈山寺跡」の項に

○東山区清閑寺靈山町

靈山（靈鷲山）にあった現正法寺の前身の寺、天台宗延暦寺に、属した。

がそれである。限ち「わしのやま」即ち、靈山は「音羽山清水寺」の北に隣探した地である。それ故、前掲の『拾玉集』に見えた「音羽山は、澁谷越の音羽山である。」

『能因歌枕』その他の指示の如く、歌枕の「おとはやま」を山科にかぎるのは原則ではあるが、同名の故に通用させる程度の例外はみとめる方が自然であろう。『拾玉集』の例を誤用と考える必要はあるまい。藤原清輔『和歌初学抄』の「読習所名」の項に

花さかぬのべに花をさかせ、紅葉なき山には紅葉をせさするは

歌のならひ

とも言うのである。歌枕を過度に固定して考えれば却って不自然であろう。

これで、歌枕としての「おとは山」についてはほぼ述べたと思うが、山科の音羽山と、清水寺の音羽山が、そもそも無関係な成立ではなさそうだ、という事実について注意を拂うべきであろう。

六波羅ハ元ト平氏の宅趾ナリ。賀茂河ノ東ニ在リ、其境域蓋シ五條ヨリ七條ニ亘レリ。平氏滅亡ノ後、將軍頼朝ノ上洛シテ、平頼盛ノ池殿ノ邸趾ニ就テ新ニ邸宅ヲ造リ、暫ク之ニ居ル。其後妻政子子頼家上洛シテ、之ニ居レリ。泰時京師ヲ陷ルニ及ビ、遂ニ此邸ニ據テ府ヲ初メ、上ヲ北方トシ、下ヲ南方トス。

である。小松内大臣と称した平重盛の邸もこの域内にあった。即ち、澁谷越の入口付近を小松谷と言ひ、その邸を小松殿と呼んだ。付け加えれば、小松殿の跡は、現在の東山七條上ル、東側の妙法院の北にある。ただ今専売公社の病院が建てられたが、その中庭に、かつての小松殿の庭園の池の跡が保存されている。

六波羅がその機能を失った頃から、商業の發達がみられ、それともなつて賀茂川の水運を利用して七條周辺に問屋が集ることになった（現在の内浜なる呼称はその名残）。北陸や近江の海産物水産物を扱う問屋も集つてきた（藤本利治『同業者街』）。北陸や近江から山科經由で七條へ入ろうとすると、日岡峠よりも澁谷越の方が距離が近く、便利である。当然、澁谷越は近世以降の市民生活に直接かかわる道として、盛んに利用され、明治に及んだのである。

以上で、古今集の中世近世の註釈が清水の音羽山を自明のこととして扱つた理由がわかると思ふ。

それ以前、平氏繁昌以前、（殆んどの古今集註釈は以後のものである）の東方への道は、やはり栗田口經由、日岡を越えるのが普通

である。延喜式の東国への道はこちらである。

例えば、『かげろふ日記』中巻の石山詣での章、

石山に十日ばかりと、おもひたつ。

栗田山といふほどにゆきさりて、いとくるしきを、

山科にて。明けはなるるにぞ、いとけむせうなる心地すれば、

からうじていきすぎて、

走井にて破子などものすとして、幕ひきまはして、とかくするほどに、いみじくののしる物く。

関うちこえて、

打出浜に、しにかへりていたりたれば、さきたちたりし人、船にこもやかたひきて、まうけたり。ものもおぼえず、はひのりたれば、はるばるとさしいだしてゆく。

申の刻ばかりに、寺の内につきぬ。

右が、『かげろふ日記』の順路である。

『源氏物語』関屋の巻、

打出の浜くるほどに、殿は栗田山越え給ひぬとて、御ぜんの人々、道もさりあへず乗込みぬれば、関山に皆おりて、

右、空蟬の一行が常陸の国より上京してきて、石山詣での源氏と出会う場面。打出浜（大津市）で前驅に出会い、関山（逢坂関）まできて、ここで車を下りて源氏をやりすごすのである。栗田山は東国

実俊、大江山へは新藤判官助経承つて向ひけり。

というあたりが早い例とすべきである。

平安京造都以前からの古道であるらしいのに、何故こうなったのか。それは平安京官人の官道としては、『源氏物語』でわかる様に粟田口經由の道が主として用いられ、澁谷越がさかに用いられる様になったのは六波羅なる機関の発達とともにあったからである。

澁谷越の京都側の入り口に六波羅が位置していたのである。それは、

『太平記』巻第九、「六波羅攻ノ事」に

一陣破レテ殘黨全カラザレバ、六波羅ノ勢竹田ノ合戦ニモ打負、木幡、伏見ノ軍ニモ負テ、落行勢散々ニ、六波羅ノ城へ逃籠ル。勝ニ乗ツテ逃ヲ追フ四方ノ寄手五万余騎、皆一所ニ寄テ、五條ノ橋爪ヨリ七條河原マデ、六波羅ヲ囲ヌル事幾千万ト言數ヲ不知。サレドモ東一方ヲバ態ト被開タリ。是ハ敵ノ心ヲ一ツニナサデ、輒ク責落サン為ノ謀也。

これで六波羅の位置と規模はほぼ見当がつく。その「東一方」が澁谷越であることは、次章の「主上上皇御沈落事」の記事で明らかである。即ち、わざと開けられた東一方から、主上上皇その他人々が落ちる。

東一方ヲバ敵未ダ取マハシ候ハネバ、主上上皇ヲ奉取ツテ、関東へ御下向候テ後、重ネテ大勢ヲ以テ、京都ヲ被責候ヘカシ。という進言によって、兩六波羅は、主上上皇女院を落す。東一方が

『音羽山』について

が澁谷越であることは、続く記事に、

五日闇ノ比ナレバ、前後も不見暗キニ、苦集滅道ノ辺ニ野伏充満テ、十方ヨリ射ケル矢ニ、左近将監時盛ハ、頸ノ骨ヲ被射テ、馬ヨリ倒ニ落ヌ。

とあるので明白である。

澁谷越が六波羅に便宜の道である事は、特に太平記によらなくとも、地図を思ひうかべれば殆んど自明のことである。それ故に『山州名跡志』の苦集滅道の解説に

関東ニ左遷ノ人。好ンデ此道ヲ經ルコトハ。京都政道ノ司。六波羅ニ居住スル時。其所ヨリ東ニ到ルニハ。此道ヲ經ルニ使アル故也。

という。これは「苦集滅道の名義解でもあるが、勿論、右の太平記に記された如き事件を念頭においての記事である。

粟田口經由の官道であると、山科盆地の北辺を東から西へすぎ、日岡、粟田口と、三條大橋へ直線的に通じ、六波羅へは其處から南へ折れ、賀茂川に沿って下らねばならない。迂路である。澁谷越は、山科盆地のやや西寄り、御陵、廚子奥（辻之奥）を経て、東山山稜を斜断して直接し六波羅に入ることになる。

それ故、澁谷越の利用は六波羅設置とともにさかんになった。もつとも、正確に言えば六波羅はそれ以前の平氏一族の邸館のあとに建てられたのであって、平氏の繁榮とともに澁谷越の繁昌もはじまったと言えよう。『平安通誌』の記事を借用すると、

「山科の」とはつきり述べているので、疑問の余地はない。

卷第十九、雑体。

古歌奉りし時の目録のその長歌

貫之

ちはやぶる 神の御代より くれ竹の 世々にも絶えず あま
びこの 音羽の山の はるがすみ おもひみだれて

一〇〇二

この例は判断の規準がない。

以上、総合すると、古今集には音羽山は六回あらわれる。我々がはじめに問題にした一四二、と最後の一〇〇二、とが不明である。

他の四例は山科と判断される。それ故、不明の二例も山科の音羽山だと結論を出してしまえば、事は簡単な様であるが、これは単純にすぎる判断だ、と思われる。

何故なら、東山の音羽山を何となく放棄して、つまり澁谷越を放棄して、山科の音羽山を適用することは無茶というものである。即ち、澁谷越という道は、近世から明治まで、山科（したがって近江以東へも）——京都間の最も普通の交通路であり、しかも、この事実は、なお、吾人の記憶のうちにあることだからである。現在の様に、日岡峠をこえる道（三条大橋を起点とする所謂東海道、国道一号线でもある。）が市民の普通の道になるのは京津電車が開通してからである。

澁谷越については『大日本地名辞書』の「久久目路」の項に

清水寺の南、阿彌陀峰の北麓を繞り宇治郡山科へ通ず、或は苦集滅道に作り、又澁谷越シルタニと曰ふ、澁谷今澁谷に作る。

と言う。北村季吟『菟芸泥赴』の「澁谷」の項に

大佛の北馬町より山科花山醍醐等への道也。下学集云教持和尚山崎に別業あり。三井寺より此山道を越て常に行かよはるるに其木履の音苦集滅道と聞ゆ。其故にこの道を苦集滅道といふ云々。

右の「馬町」とは

馬町といふは五條橋の南より澁谷にこゆる道路也。

という。

大要、右の如くである。具体的には『山城名跡巡行志』に

汁谷越又作藩谷亦言苦集滅道越自同橋（五條橋）至御陵村一里十町。歴清閑寺北花山辻之奥村。ミササキ

がよくわかる。御陵村、辻之奥村はともに山科の域内である。

この澁谷越の起源は、平安京造郡以前にあるらしい（学芸書林『京都の歴史』I平安の新京、二五三頁）。その根拠は必ずしも明示されていないが、とにかく古道にはちがいない。しかし、用語例としては『保元物語』卷之一「官軍方々手分の事」に

義朝義康は内裏に候ひて、君を守護し奉れ、その外の檢非違使は皆関々へ向ふべしとて、宇治路へは安芸判官基盛、淀路へは周防判官秀定、粟田口へは隠岐判官維繁、久久目路へは平判官

する考え方。及び、小沢正夫博士の如く、逢坂山の南（山科）と解する考え方がある。

右の註釈書群を見ると、概して、古いものに澁谷越、新しいものに逢坂説をとる傾向がみとめられる。

この辺で、注意せねばならないのは、近世の常識の音羽山（澁谷越）から、特に、理由が示されることもなく、註釈が、あつさり逢坂説に転換して行つた、という現象である。

当然相当の理由説明がなければならぬ所である。でなければ安定した註釈にはならない。

そこで、次に、『古今集』内の「音羽山」の使用例を詳しく見て、その他の事例とを併せ考え、その変遷をたどってみようと思う。

古今集内の音羽山の例は小沢博士の示されたもので全てである。

巻第五、秋歌下、

石山にまうでける時、音羽山のもみぢを見てよめる

紀貫之

秋風の吹きにし日より音羽山峰のこずゑも色づきにけり

二五六

「石山」は近江国の石山寺である。その途上での作である。後述する様に当時の石山詣での順路は『かげろふ日記』や『源氏物語』に見える。それによると、粟田口——日岡峠——四宮——追分——

逢坂関——打出浜——石山寺、である。つまり、ほぼ国通一号線に

「音羽山」について

沿い、山科盆地の北辺を西から東へ横断して逢坂関を越え、打出浜（大津市）から瀬田川に沿って南下して（この間舟行のこともある）石山寺に入る。それ故、この紀貫之の作も、澁谷越を通つたのではない。即ち、この作の音羽山も山科の音羽山である。

巻第八、離別歌。

音羽山のほとりにて、人をわかとてよめる

貫之

おとは山木高く鳴きて時鳥きみが別れを惜しむべらなり

三八四

「人を別る」といえば、逢坂関と考えるのが当然であろう。これも山科の音羽山である。

巻第十一、恋歌。

題しらず 在原元方

音羽山音に聞きつつ逢坂の関のこなたに年を経るかな

四七三

これは佐伯梅友博士が指摘され、音羽山——山科説の論據とされたものである。逢坂関と詠み合せられる「音羽山」と言えば、山科の音羽山であるのは言うまでもないことである。

巻第十三、恋歌三、

題しらず よみ人しらず

山科の音羽の山の音にだに人の知るべくわが恋ひめかも

六六四

く澁谷越として處理している）に適当に手を加えられた結果、奇妙な註を作ってしまったのだと考えられる。

三浦圭三『古今和歌集新講』（昭和四年）

○音羽山 山城国南の京に近い山科のほとりにある山。京から近江に往くには音羽山を越えて逢坂を過ぎて往くのが順路であった。

これは山科の音羽山を問題にされた様であるが、「京から近江へ往く順路」が音羽山を越えて逢坂を過ぎるとすれば、澁谷越であつても、栗田口、日岡徑由の旧東海道（後述）であつても、どちらかの「音羽山」をこえるのであるから、どちらを念頭にしての記述か見当がつかない。

谷鼎『古今和歌集評解』（昭和二十五年、有精堂）、同書一八四頁。巻第五、秋歌下、二五六の註

石山に詣でける時、音羽山の紅葉を見てよめる

貫之

秋風のふきにし日よりおとは山みねのこずゑも色づきにけり

○石山——近江国の石山観音。京都からは、音羽山の南麓を通り、久久目路（今の澁谷越）を越えて、山科から逢坂に出たといふ。

○音羽山——京都の東山の一峰で、今、清水寺のある山

この註ははっきり、澁谷越との見解である。

佐伯梅友博士、古典文学大系『古今和歌集』（昭和三十三年）岩波書店

○おとは山——京都から近江（滋賀県）に出る道にあたる。——
↓四七三

明言はされていないが、引用の四七三の内容から山科の音羽山である。

小沢正夫博士、日本古典文学全集『古今和歌集』（昭和四十六年。小学館）

「音羽山」という地名は京都にいくつかあるが、この音羽山東山区山科（筆者註、現在では山科区）の音羽山で滋賀県との境になる。逢坂の関の南にあり、都の人が東国に旅する時には必ず見られた。二五六、三八四、四七三、六六四、一〇〇二。

これは極めて明瞭に音羽山が、逢坂関の南の音羽山で、東山三十六峰の一つとしてのそれではない、とする見解である。

片桐洋一『古今和歌集』（創英社、全対訳日本古典新書）

○音羽山 京と近江（滋賀県）のへだてをなす山。逢坂関のすぐ南。東国へおもむく人はすべてここを通った。

小沢博士と同様の判断である。

以上で、ほとんどの諸註釈書の見解を概観した。音羽山を、『金子評釈』『谷、評解』に代表される澁谷越、即ち、東山三十六峰の一つと

諸註釈書を検しても、この件は、必しも具体的ではない。中世近世の註釈書ではこの問題への論述はない。これは、奇妙に見える現象である。

論述がない、ということは特に言及しなくとも自明とする理解があった、ということである。自明とすると右の二つの音羽山のうち、どちらが該当するかと言うと、言うまでもなく後者ということになる。当時は澁谷越がもつとも普通のコースであつたからである。この事情は明治でも同様であつた。これは筆者が年寄りから直接聞いていることである。

金子元臣『古今和歌集評釈』（昭和二年）によると、

○音羽山 山城国山科にある東山の一峰。

そこに今も名利清水寺がある。

とし、「評」の項では

「音羽山を越えける」といっても、この路は音羽山と阿彌陀が峰との山峡を山科へ出る道で、今澁谷越といふ處である。

という。これははっきりした意見であつて、近世、明治期の常識を明文化したものと考えてよい。ただ、「山科にある東山の一峰」という言い方は——澁谷越と認識した上での話であるから——誤記と言わねばならない。清水の音羽山は山科ではない。現行の行政区割でも東山区である。「山科の音羽山」と言うと、逢坂関の南側の「音羽山」になる。

窪田空穂『古今和歌集評釈』（上巻、昭和十年）では

『音羽山』について

○おとは山 京都市の現在の山科にあり、東山の中の一峰。今、清水寺のあるところ。京都から近江へ出る道の口になっている。これは明らかに『金子評釈』の誤記の部分の継承である。又、「現在の山科」とはどういうことか。「山科」は『万葉集』から出てくる古い地名である。「京都から近江への道の口になっている。」は曖昧さを増幅した。即ち、「道の口」なる用語が今の場合不適切であるばかりでなく、それが「入り口」程度の常識的な意味で使われたとすれば、清水寺あたりが近江への入り口とは考えられない。近江への入り口なら逢坂関である。

松田武夫博士『新釈古今和歌集』（昭和四十三年、風間書房）では、

○音羽山——京都市にあつて、東山三十六峰の一。麓に清水寺がある。京都から近江国へ出る道の口にあたる。

これは『窪田評釈』の継承である。それも、曖昧な部分のみの継承である。

右の窪田評釈、松田新釈の二つは、清水といい、東山と言われながら、澁谷越とはっきり認識しておられるのか、ということそうでもない。「近江への道の口」と言われる。これなら澁谷越ではあり得ないのである。

理由は、兩書とも、音羽山が東山と山科との兩方にあることに注意しないで、或は、兩者を混同して、『金子評釈』（これはともか

『菟芸泥赴』の山科の音羽山の頂に

逢坂の南大塚のうへ、山科の音羽是也。

音羽山三所有。清水、西坂本、此所也。

井蛙抄に粗ことはれり。

とする。『井蛙抄』（巻四）をみると、「おとは——瀧——河

——山」の項をたてて、

古今（九二八）

ひえの山なるおとはのたきをみてよめる

ただみね

おちたぎつたきのみなかみ年つもりおいにけらしなくろきすぢ
なし

拾遺十（四四五） 伊勢

おとは河せきいれておとすたぎつせに人のこころの見えもする
かな

古今十三（一一〇九） 続人しらず

山しなのおとはのたきのおとにだに人のしるべくわがこひめや
も

同十一（四七三） 在原元方

おとは山おとにききつつあふさかのせきのこなたにとしをふる
かな

続古今一（一二） 定家卿

おとは川雪げの水もいはこえて関のこなたに春はきにけり

西坂本、山階ともに山城国也。滝と河とは通兩所歟。おと
は山は限山階歟。

二一

右の『井蛙抄』の但し書きの「滝と河とは通兩所」とは、「おとは
の滝」「おとは川」は西坂本にも、山階にもある、の意で、「おと
は山は限山階」とは「おとは山」というものは山階だけである、の
意である。

山科の音羽山というのは京都市山科区で、滋賀県大津市との境に
ごく近く、高五九三メートル、逢坂関の南側の山である。最初に掲
げた『古今集』巻三、一四三の音羽山がこの音羽山だとすると、作
者の紀友則は逢坂関を越えたということになる。

しかし、もう一つ、一層ポピュラーな音羽山がある。即ち、井蛙
抄に載せず、菟芸泥赴に記された清水の音羽山である。東山三十六
峰の一つ、清水寺の東（つまり背後の）の山で、高二四〇メートル、
清水寺の山号でもある。この麓を通って、京都盆地から山科へ越え
る道がある。所謂「澁谷越」で、中世近世を通じて最も普通に使わ
れた道である。勿論逢坂関をこえて東国へ行く場合も、である。最
初に掲げた『古今集』の一四二の「音羽山をこことだとすれば、紀友則
は澁谷越を通って、山科或は近江、以東の国へ出かけたことになる。

古今集一四二の「音羽山」が右のどちらであるか、このことが先
ず問題になるのである。

歌枕

『音羽山』について

奥村恒哉

『古今集』巻第三、夏歌

音羽山を越えける時に、時鳥の
鳴くを聞きてよめる

紀友則

音羽山けさ越えくれば時鳥梢はるかに
いまぞ鳴くなる 一四二

この作、口語訳という意味では特に問題はない。しかし、「音羽山」が問題になる。

即ち、音羽山なる山は二箇所（東山区と山科区と）にあり、そのどちらであるかを決めなくてはならない。ところが奇妙なことには中世近世の諸註釈書類（これらは、概して、歌枕については現代の註釈書類より丁寧である。）はこの問題をとりあげることなく、明治以降になつてはじめてとりあげられ、曖昧な解釈がほどこされていた。何故こういうことになったのか、その事情に説明が与えられないと、例え、結果があたつていても、歌枕の説明としては甚だ不

透明なものであるし、註釈としても不親切だという批評をまぬがない。

「音羽山」については、筆者は、かつて、池田亀鑑編『源氏物語事典』上（東京堂、昭和三十五年）において、山科の音羽山（高五九三メートル）であることを述べた。この結果を変更する必要はないと考える。

新しく森本茂『校注歌枕大観』（大学堂書店、昭和五十四年）の場合も、同様の結論をとっている。

筆者が山科としたのは、『古今集』巻第十三、恋歌三、「題しらず よみ人しらず」

山科の音羽の山の音にだに人の知るべく

わが恋ひめかも 六六四

とあることと、『能因歌枕』に「おとはやま」は山城国と近江国の両方に掲出されていること（この事實は、音羽山が、山城国と近江国との国界にあること、つまり山科の音羽山であることを示す。

同様の事例は、「まつちやま」が大和国と紀伊国と両方に掲出されているのも、そうと言える）の両方を論據にしたものである（『源氏物語事典』）。

次に、地誌及び『古今集』の註釈書にあらわれた現象についてうかがってみよう。